

モンゴル語の動詞形式 -xAAr
一節連結の意味とその形態的特徴から一

山田 洋平
(東京外国語大学)

キーワード：モンゴル語，連結，副動詞，目的節

1. はじめに

本稿はモンゴル語の動詞の取る形式 -xAAr について、とくに次の例 (1) に見る目的節述語になる用法を中心として論じるものである¹。以下、-xAAr がつく語に下線を引いて示す。以下の議論ではこの形式についてこれ以上の分析はせず、-XAAR というグロスを振る。

(1) *bi calingaa ur'dčilan awaxaar xöcöld-ž baigaa.*

bi calin-AA ur'dčil-n aw-xAAr xöcöld-ž baj-AA
1SG salary-REFL to.advance-ASS to.get-XAAR to.endeavour-SIM to.be-IPFV

「私は給料を先取りできるように頑張っています」

インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/78kyv>)

他方、同形の -xAAr が確定条件の意味を表す (2) のような例も見られる。

(2) *sajn dasgal xijgeed irexeer gurwan ügiig neg bolgož xardag.*

sajn dasgal xij-AAAd ir-xAAr guraw/n üg-IIg neg bolgo-ž
well training to.do-ANT to.come-XAAR three word-ACC one to.make-SIM
xar-dAg.
to.see-HBT

(速読の説明) 「よく練習していくと3語が1語に見える (ようになる)。」

インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/45591>)

そもそも -xAAr は形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が接続した形と一見同形であるが、これらが別物であるのか、どのように異なるのかについては従来十分に検討されてきていない。

本稿では Dixon (2009) による節連結の意味的分類に従って、モンゴル語の節連結に用い

¹ 本稿は2021年11月21日にオンラインで開催された日本言語学会第163回大会におけるワークショップ企画「アルタイ型言語における節連結の意味とその形式的特徴」(蔡ほか2021)における分担発表稿に基づきつつ、大幅に加筆したものである。とくに本稿の3.2.は蔡ほか(2021)によるワークショップ企画全体の説明を踏まえ書き加えたものであり、4.は諸形式の選択に恣意的な判断を多分に含んでいたところ極力恣意性を廃し、また十分な説明を記載するよう努めた。5.以降の分析において追加の調査と分析を加えた。

られる形式を整理する。その上で関連する諸形式と比較しつつ目的の意味を成す **-xAAr** が形動詞接辞 **-x** に造格接辞 **-AAr** が接続した形とは異なるものであると分析した方が妥当であろうことを論じる。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で前提知識を概観したのち、3 節で先行研究での記述をまとめる。4 節では先行研究の記述に基づきモンゴル語の節連結の諸形式の分類を試みる。この上で 5 節では先行研究の問題点を指摘し、6 節で **-xAAr** に関する調査・分析を行う。最後に 7 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿における例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 前提知識

2.1. モンゴル語の基本情報

モンゴル語は、モンゴル国や中国内モンゴル自治区といった地域に分布する言語であり、本稿で主に対象とするのはこのうちモンゴル国で広く通用するハルハ・モンゴル語である。典型的には主要部後置型・接尾辞型の、いわゆるアルタイ型の言語である。提示する例はモンゴル国における新モンゴル文字正書法に従い、次のようにラテン文字転写したものを示す。(右がラテン文字) a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, е:yö/ye, ё:yo, ж:ž, з:z, и:i, й:j, к:k, л:l, м:m, н:n, о:o, ө:ö, п:p, р:r, с:s, т:t, у:u, ү:ü, ф:f, х:x, ц:c, ч:č, ш:š, ь:’, ы:y, ь:’’, э:e, ю:yu/yü, я:ya。

なお、モンゴル語の各種接辞は語幹の母音や末尾の音に応じて異形態を取りうるが、接辞の代表形を示すのにラテン文字の大文字を用いてこれを表現する。例えば本稿の標題にある **-xAAr** とは、実際に動詞語幹に接続した場合に実現形として接辞内部の **AA** の部分が母音調和の原則によって 4 つの母音になって実現し、**-xaar**, **-xeer**, **-xoor**, **-xöör** という形式が現れることを意味する。

2.2. モンゴル語の動詞形態論

モンゴル語の動詞は、語幹に対し動詞接辞 1 つを接尾することで構成される。動詞接辞は主節の述部を成す定動詞接辞、名詞節や連体修飾節の述部を成す形動詞接辞、連用修飾節の述部を成す副動詞接辞に分類される。形動詞接辞には未来 **-x**、完了 **-sAn**、未完了 **-AA**、習慣 **-dAg** がある。形動詞接辞が付された動詞形は、名詞節の述部として主要部になり、形動詞接辞の直後に格接辞を付すことも可能である。

連用修飾節の述部を成す副動詞接辞が付された動詞形は、モンゴル語における節連結を成すための形式であると言える。しかし節連結は副動詞接辞のみならず、形動詞接辞を付した名詞節や連体修飾節に格接辞や後置詞を組み合わせることによっても表現される。節連結における従属節が取りうる形式について、詳細は 4.2. を参照されたい。

2.3. その他

その他、本稿に関連する名詞形態論のうち造格と所属のカテゴリについて記載する。

名詞に付される格接辞のうち造格 **-AAr** {**-INS**} とは、道具や手段を表す他、幅のある時間や通過する場所など様々な用法を有する。

所属のカテゴリは名詞句 (格接辞の後ろ) や一部の副動詞接辞の後ろに付され、所有や所属といった関係を表すものであり、再帰所属と人称所属に分類される。このうち再帰所属の -AA {-REFL} は主語に関わるモノ・コトを表す名詞句に必須的に用いられるもので、人称所属のうち =n' {=3} (三人称所属) は主語に関わらないことを表す任意の要素である。

3. モンゴル語の -xAAR

本節では本稿で扱うモンゴル語の -xAAR について先行研究の記載をまとめる。主に形式的な側面を 3.1. で、主に意味的な側面を 3.2. で扱う。

3.1. -xAAR という形式

Kullmann & Tserenpil (2015: 166) は目的副動詞 (原典における呼称は *Intending sVDS: sVDS* とは *Subordinating Verb Determining Suffix* 「従属 (節を成す) 動詞修飾接辞」の略語) -xAAR について '(in order) to' 「～するために」と訳しうる主節の叙述内容が起こる理由を表すものであるとして紹介し、次のような例を挙げている (3, 4)。

(3) *bi nogoo awaxaar delgüür yaw-san.*

bi nogoo aw-xAAR delgüür yaw-sAn²

1SG vegetable to.take-XAAR shop to.go-PRF

'I went to the shop (in order) to buy vegetables.'

「私は野菜を買いにお店へ行った」

(Kullmann & Tserenpil 2015: 166. 英訳も)

(4) *bi šalgaltaa sajn ög-xAAR ertn-AAs beltge-ž baj-na.*

bi šalgalt-AA sajn ög-xAAR ertn-AAs beltge-ž baj-nA

1SG exam-REFLwell to.give-XAARearly-ABL to.prepare-SIM to.be-NPST

'In order to do well on an exam, I prepare early.'

「私は試験で良い成績が取れるように早くから準備している」

(Kullmann & Tserenpil 2015: 166. 英訳も)

この形式について、「新モンゴル文字による綴りを見る限りは未来形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr の組み合わせのように見え、実際にそのような由来に基づくのであろう」としている (Kullmann & Tserenpil (ibid.)). しかし伝統的なモンゴル文字綴りでは未来形動詞接辞と造格接辞を組み合わせると -qu bar/-kü ber となるのに対し、「するために」という意味の動詞接辞は -qar/-ker という異なる綴りが用いられる³。Kullmann & Tserenpil (ibid.) はこのことを根拠として両者を区別している。

² なお、この目的節は例文 (2) に見るように移動以外の動詞を主節に取ることができるようであるが、Kullmann & Tserenpil (2015: 166) が挙げる 9 例のうち 5 例で主節述語が yaw_ 「行く」という動詞であり、他にも ir_ 「来る」、xödöl_ 「動く、出発する」、gar_ 「出る」という移動の意味を表す動詞が共起している。

³ Kullmann & Tserenpil (2015:166) は例文 (3)(4) に対応する伝統的なモンゴル文字綴りとして ab-qar {to.take-XAAR} = aw-xAAR, ög-ker {to.give-XAAR} = ög-xAAR といった例を挙げている。伝統的なモンゴル文字綴りは、モンゴル語のより古い形式を保持するものである可能性があるが、モンゴル文字綴りが比較

Kullmann & Tserenpil (2015: 96) では造格の機能の一つとして「根拠の説明」(Explaining causes) を挙げ、未来形動詞接辞 -x のあとに造格接辞 -AAr が続く組み合わせの例を提示している (5)。未来形動詞接辞 -x についての説明 (Kullmann & Tserenpil 2015: 148) の中でも格接辞が付された用例として、造格接辞を伴う例として (6) のような例を示しているが、そこではとくに意味の説明をしていない。

(5) *nar garaxaar dulaan boldog.*

nar gar-xAAr dulaan bol-dAg
sun to.rise-XAAR warm to.become-HBT

‘When the sun rises it becomes warm. (“Through the rising of the sun...”)

「太陽が出たら暖かくなる」

(Kullmann & Tserenpil 2015: 96. 英訳も)

(6) *šönö nom unšixaar nüd muuddag.*

šönö nom unš-xAAr nüd muud-dAg
night book to.read-XAAR eye to.go.bad-HBT

‘When you read at night, your eyes go bad. (“Because of nighty reading...”)

「夜に本を読むと目が悪くなる」

(Kullmann & Tserenpil 2015: 148. 英訳も)

いずれも英訳では ‘when’ 句で訳出されており、また理由や根拠を表すものである (causes, ‘Because...’) ことが示唆されている。

さらに Kullmann and Tserenpil (2015: 165) は「必然的に連続する2つの動作」(two actions follow each other logically) を表す論理連続副動詞 (Logically Succeeding sVDS) -xIAAr の説明の中で、「この副動詞の代わりに同じ文法的な意味を成す未来形動詞接辞 -x + 造格接辞 -AAr という組み合わせが使われることがよくある」としている。

Janhunen (2012: 164) は副動詞接辞をそれ以上の形態素に分解できない一次的副動詞と複数の形態素を含むと見られる二次的副動詞に分類している。その上で、目的の意味を表す -xAAr を目的副動詞 (final) として未来形動詞接辞 -x と造格接辞 -AAr から成る二次的副動詞であるとしている (Janhunen 2012: 166)。同時に Janhunen (2012: 169-171) は形動詞接辞+格接辞 (与位格、奪格、造格) からなる疑似副動詞 (quasiconverb) を立て、その一つに形動詞接辞+造格接辞という組み合わせで様態 (modal, ‘by way of’ 「～することによって」の意) の機能を有する -xAAr と同形の形式を挙げている。伝統的に目的節を成す機能を有する場合は副動詞接辞に含められるとし⁴、形式が同一である以上これらを多義と見るか同音異義と見るかは恣意的にしか決定できないとしている (Janhunen 2012: 171)。

の新しい口語表現に合わせて綴り方が改まるケースもある。この例も、綴りの違いが少なくとも語源的な違いを示すわけではない。また本稿の査読者より、この -qar/-ker は論文などの文体において目的の意味を明示するために使われるもので、実際の使用頻度は低い印象があるとの指摘をいただいた。

⁴ Janhunen (2012: 171) は他に -xAAr の選択/比較副動詞 (selective/ comparative) 「～するよりも(むしろ)、～する代わりに」としての機能についても挙げている。これは 清格尔泰 (1991) の分類 (7) における<7> 選択関係>に該当するものと思われる。

3.2. -xAAr の意味

形動詞接辞+造格接辞の形式が成す意味について、清格尔泰 (1991:298-303) は 12 種に分類している。以下の (7) は清格尔泰 (1991) による分類をまとめたものである。例は代表的なものの和訳のみ示し、該当箇所には下線を引く。

(7) 形動詞接辞+造格接辞の意味 (清格尔泰 1991:298-303 のまとめ)

- 1) よりどころにする行為 (例: 殺すことで脅す)
- 2) もう一つの行為の内容⁵ (例: 終わったと見做す)
- 3) 形容詞述語とともに用いて主述関係を成す (例: 走るのが早い)
- 4) 時機関係 (例: 彼が来たら聞いてみよう)
- 5) 並行関係 (例: 座りながら眠る)
- 6) 目的関係 (例: 医者になるために頑張る)
- 7) 選択関係 (例: 立つよりも座れ)
- 8) 依拠関係 (例: 言った通りにする、見たところ間違っている)
- 9) 原因 (例: よく頑張ったことで成功した)
- 10) 未然 (例: 行くことになる、帰ろうとしている)
- 11) すべき行為 (例: 言うべき言葉がない)
- 12) その他の慣用表現 (例: 嫌けど行くときは行く)

清格尔泰 (1991) は上記のような名付けをしているだけでそれぞれの用法について詳しい説明をしていない。しかしそこに付された例文から、次のように整理し直すことが可能であろう。

1) の「よりどころにする」とは漢語の「凭借」という語を訳したものだが、これは「造格」を指す用語にも用いられるものであり、造格の本来的な用法にあたるものと見られる。例としては未来形動詞接辞に造格が続く例のみが挙げられている。他方、9) の原因には完了形動詞接辞に造格が続く例のみが挙げられていて、1) と 9) の用法の違いはこうした形動詞接辞の意味によって生じるものではないかと思われる。

4) の時機関係と 5) 並行関係は例文中に現れる形動詞接辞に偏りがある。4) では多くが未来形動詞接辞を伴うもので、「～すると／～したら／～するときに」などと訳せそうな用法である。先に挙げた (2)(5)(6) の例の用法もここに含まれるのではないかと考えられる。1 例だけ未完了形動詞形に否定の要素を伴う「まだ～していない」という形式を伴うもので「～していないうちに」と訳しうる例である。5) は未完了形動詞接辞を伴う例のみが挙げられており、この未完了形動詞接辞の成す意味が「～しながら」という同時に進行する動作の意味を成すものと思われる。

⁵ この説明 (原文では「表示另一个行为的内容」) の意図するところについて筆者は十分に理解できていないが、「主に「～と見做す」という内容を表す」(原文では「主要是表示“做为”“认为”的内容」) というところから察することができる。

4. モンゴル語の節連結形式

本節では節連結の形式の分類に関する先行研究をまとめ、モンゴル語の節連結を表す諸形式の分類を試みる。まず 4.1 で Dixon (2009), Aikhenvald (2009) による類型論的観点からの節連結の形式の分類について概要を示す。4.2 ではこれをふまえてモンゴル語の節連結を表す諸形式を意味で分類する。

4.1. 節連結の意味と形式

Dixon (2009)⁶ は、節連結における節と節の間の意味関係を表すためにどのような文法的手法が用いられているのかについて述べている。具体的には統語レベルの主節／非主節と意味レベルの焦点節 (中核的な行為・状態を表す節)／支持節 (時間的環境・条件・前提・前置きなどを表す節) の対応関係、節連結の標識がどちらの節に標示されるか、節連結に用いられる標識の形態・統語的特徴は何かなどに注目して調べている。意味に関しては、6 つの大きな意味タイプ (I時間、II帰結、III潜在的帰結、IV追加、V代替、VI様態) に分け、さらに 16 の下位タイプに分類している。下位タイプの詳細は次節で示す。

Aikhenvald (2009) は Dixon (2009) に基づいて調査された諸言語について総括したもので、その中である節連結の形式が多機能性を有する場合どのような意味を共有しうるか一覧にして示している。この一覧は 5 節で筆者の考察を加えて提示する。

4.2. モンゴル語の節連結形式の分類

4.2.1. 分類の方針

本節では、モンゴル語における節連結の諸形式のうち特に従属節の動詞述語が取る形式を取り上げ、Dixon (2009) の意味分類に基づいて 4.2.2. の 4 つの表 1~4 にまとめる。

ここで扱う諸形式とその意味については Kullmann & Tserenpil (2015) による接続形式の一覧と、(7) で見た形動詞接辞+造格接辞の表す意味分類 (清格尔泰 1991) を利用して選出する。Kullmann & Tserenpil (2015: 297-318) は “conjunctions” として文またはその一部をつなぐ諸形式を *coordinating conjunctions* 16 種、*subordinating conjunctions* 26 種に分けて記述している。ここでいう “conjunctions” とはいわゆる接続詞という独立語に限らず、動詞の屈折語尾を含む様々な形式を含むものである。このうち専ら節をつなぐものを選出し⁷、ここに含まれない副動詞接辞やその他必要と思われる形式を加えて、本稿における分析対象とする⁸。清格尔泰 (1991: 298-303) の提示する形動詞接辞+造格接辞のうち、主述関係を表すという 3)、一種の補文節を成すものと見られる 2)、10)、また名詞修飾節を成す 11) は本稿に

⁶ 本段落の説明は蔡ほか (2021) におけるまとめを利用した。

⁷ Kullmann & Tserenpil (2015) はこれらの形式について、つなぎうるのが非述部か述部か、また文や段落かそれぞれ記述している。ここでは専ら非述部をつなぐと記載された諸形式 (*ba*, *-güj*, *bolon*, *č*, *tüünčlen*, *tödij biš*) を考察の対象外とした。

⁸ 表 1~4 では Kullmann & Tserenpil (2015) が括弧を付けて任意の要素であると見做している副詞的な要素は除外し、それぞれの形式は筆者が形態素分析して示すこととした。このほか Kullmann & Tserenpil (2015: 282-296) の「後置詞」も参照し、必要なものを適宜追加した。表中では網掛けでこれを示す。Kullmann & Tserenpil (2015: 319) では代動詞や代名詞を含む接続表現 (*Proword-Conjunctions*) を挙げているが、この多くが代動詞や代名詞を含まない本稿で扱う諸形式の説明で十分代替可能であると見て、ここでは除外した。

おける節連結を表すものではないと判断して除外し、12) は分類不明のその他として本稿では扱いを保留する。また清格尔泰 (1991) は 9) 「原因」につき完了形動詞 -sAn+造格接辞の例のみ、5) 「並行関係」につき未完了形動詞 -AA+ 造格接辞の例のみを挙げている。これらは形動詞接辞の意味 (完了、未完了) に由来するもので、実質はそれぞれ 12) は 1) 「よりどころにする行為」とともに表 4 の「VI 様態」に当てはまるものであり、5) は 4) 「時機関係」とともに表 1 の「Ir 相対的時間」に当てはまるものであると考える。

これらの形式を Dixon (2009) の意味分類により整理し、「形動詞 (=形動詞接辞を付した動詞形と後置詞などの組み合わせによるもの)」、「副動詞 (=副動詞接辞によるもの)」、その他に分類して提示する。V は動詞語幹を表し、これに続く接辞は「形動詞」または「副動詞」の動詞接辞であることを示す。V を含まない接辞は名詞類 (形動詞接辞含む) に付される接辞である。-(ハイフン) が付されていないものは接辞でない、独立性の高い要素である。それぞれの形式の分析と和訳は筆者による。

表の左列「形動詞」は動詞の形動詞接辞が付された形と後置詞⁹から成る固定的な表現 (形動詞接辞を他の形動詞接辞に置き換えられないもの) が該当する。形動詞接辞の後に格接辞が付されるものも多いが、この格接辞は後置詞側の要求によって付されたり選択されたりするものと考えられる。

表の中列「副動詞」は副動詞接辞を含む表現である。

表の右列「その他」に属するものは形動詞接辞に付されうる形式であるが、後置詞的でないもの (名詞類ではない、ないし名詞類由来ではないと考えられるもの) や、形動詞の種類を特定しないもの (どの形動詞形も直前に現れうるもの)、ge-wč のほか、次節以降で扱うため分析を保留した -xAAr が含まれる。ここに含まれるものは基本的に名詞類 (形動詞接辞) を直前に要求するが、ge-wč (表 4) は直前に特定の語類を要求しない。

表に挙げた形式のうち、本稿で扱うことになる諸形式には下線を付した。このような分類を行うことで、時制などのカテゴリを自由に選択できない (=主節述語によって決定づけられる) 形動詞・副動詞と、形動詞接辞を選択することで主節述語とは独立して時制を決定づけることができるその他とに分けることを可能とした。

4.2.2. モンゴル語の節連結

以下では表 1~4 に分けてモンゴル語の節連結がどのような形式で表されているかを概観する。

次の表 1 では「I: 時間」を示した。「I: 時間」には単純な時間の連続関係 (Is) や「~する前に」「~した後に」などの相対的時間 (Ir)、条件 (Ic) が含まれる。表 1 を見ると、単純な時間の連続関係 (Is) や条件 (Ic) は副動詞形によるシンプルな形式で表される一方、「~する前に」「~した後に」などの相対的時間 (Ir) は後置詞が形動詞接辞 (+格接辞) と組み合わせることによって表現されていることが分かる。

⁹ 後置詞という語類を立てる十全な定義は従来されていない。ここでは固定的な表現に見られる形動詞に後続する独立語 (同形式が独立語として用いられうる語) を後置詞と見做している。

表 1. 「I: 時間」

	形動詞	副動詞	その他
Is: 時間的連続		V-ž, V-AA _d , V-n 「して」 V-ngUU _t , V-mAgc, V-xIAA _r 「するとすぐ」	
Ir: 相対的時間	V-x-d 「するとき」 {V-FUT-DAT} V-x üye-d (同上) ¹⁰ {V-FUT time-DAT} V-x бүр / bolgon / tutam {V-FUT every} 「するたびに」 V-x xürtel 「するまで」 {V-FUT until} V-x xoorond 「する間」 {V-FUT while} V-x zawsar / zuur 「する間」 {V-FUT besides} V-sAn-II daraa / xojno {V-PRF-GEN after} 「した後で」 V-sAn-AA _s xojš(同上) {V-PRF-ABL after} V-x-II _n ömnö 「する前に」 {V-FUT-GEN before} V-x-tAj zereg 「すると同時に」 {V-FUT-COM degree}	V-ngAA 「しながら」 V-sAA _r 「しつつ」	-AA_r 「するときに」 {-INS}
Ic: 条件		V-WAI 「すれば」	toxioldol/nöxcöl - d {case/ condition -DAT} bol 「ならば」 ¹¹

¹⁰ Kullmann & Tserenpil (2015: 315) では baj-x üye-d {ある-FUT time-DAT} という形式で掲載し、例としては副動詞接辞 -ž {-SIM} が先行して「～しているとき」と訳しうる表現や形容詞述語文が先行する表現を挙げている。この形式は動詞 baj_ 「ある」の部分に他の動詞をあてはめることも可能であるので、baj_ を含まない形式を表に挙げることにした。

¹¹ Kullmann & Tserenpil (2015: 317) では -x toxioldol-d {-FUT case-DAT} という形式で掲載されているが、実際には -x 以外の述語形式を伴うこともあるためここに入れた。また bol は “conjunctions” ではなく小詞 “particle” として記述されている (Kullmann & Tserenpil 2015: 342)。

次に「II: 帰結」と「III: 潜在的帰結」を表2に示す。このうち「II: 帰結」は「IIc: 原因」「IIr: 結果」「IIp: 目的」に分類される。「III: 潜在的帰結」は「～しないように」という意味を表すものである。

「IIc: 原因」「IIr: 目的」などの意味関係を表す帰結には、副動詞によって表されるものが少なく、形動詞やその他の表現が該当する。副動詞としては表1で「時間的連続」に当てはめられた諸形式が「～したので」という意味で解釈されることもある。

「IIc: 原因」「IIr: 結果」を表すその他の諸形式は -x「未来」や -sAn「完了」、-dAg「習慣」などの形動詞接辞を選択することで主節との相対的テンスを表すことが可能である。

「IIp: 目的」を表すその他の諸形式には動詞 ge_「と言う／(～しよう)と思う」{to.say}を含む表現がある。

表2. 「II: 帰結」「III: 潜在的帰結」

	形動詞	副動詞	その他
IIc: 原因 「したので」		V-ž, V-AAAd, V-n「して」	-AAr {INS} učir(-aas) {reason(-ABL)}, tul bol-ox-oor {to.become-FUT-INS}
IIr: 結果 「した結果」			-AAs bol-ž {-ABL to.become-SIM} 「～のせいで」
IIp: 目的 「するために」	V-x ge-ž / g-eed {V-FUT to.say-SIM/ to.say-ANT} V-x-IIn tuld / tölöö {V-FUT-GEN purpose}		V-g ge-ž {V-IMP3 to.say-SIM} V-xAAr
III: 潜在的帰結 「しないように」	V-x=güj-n tuld / tölöö {V-FUT=NEG-GEN purpose}		

次の表3では「IV: 追加」を示した。「IV: 追加」には「IVu: 順不同の追加」「IVs: 同じ出来事の追加」「IVe: 精緻化」「IVc: 対比」といった下位分類があるが、モンゴル語の節連結の形式ではこうした意味が十分に区別されない。

いずれも単純な副動詞で表されるものは使用頻度が低く、副動詞形 + 補助動詞 (の形動詞) 的表現やその他がこれを表す。

表 3. 「IV: 追加」

	形動詞	副動詞	その他
IVu: 順不同の追加 IVs: 同じ出来事の追加 IVe: 精緻化		V-ž, V-AAAd, V-n 「して」	bögööd 「そして」 tödiġġ, mön 「だけでなく、さらに」 -AAr bar-x=güj {-INS to.finish-FUT=NEG} (=AAr ül baram) baj-tugaj {to.be-IMP3} 「～はもちろん／～どころか」 (= büü/ bitġij xel-ø {PROH to.say-IMP})
IVc: 対比		V-wč {V-CONC} V-ž /-AAAd baj-x-d {V-SIM/ANT to.be-FUT-DAT}	č 「も」 xar'-n {to.go.back-ASS} 「却って」, baj-x-d xar'-n {to.be-FUT-DAT to.go.back-ASS} 「一方で」 ge-wč {to.say-CONC} / bol-wč {to.become-CONC} ¹² 「しかし」

最後に表 4 で「V: 代替」「VI: 様態」を示す。「V: 代替」には「Vd: 離接」「Vr: 拒絶」「Vs: 提案」、「VI: 様態」には「Vr: 現実の様態」「VIh: 仮説の様態」という下位分類がある。これらはいずれも専らその他の表現によって表される。

表 4. 「V: 代替」「VI: 様態」

	形動詞	副動詞	その他
Vd: 離接			eswel, esxül 「あるいは」
Vr: 拒絶 Vs: 提案			-IIn oron-d 「の代わりに」 {-GEN place-DAT} -AAr 「よりも」 {-INS}
Vr: 現実の様態 VIh: 仮説の様態			-AAr 「によって」 {-INS} yos-oor 「に従って」 {rule-INS} -IIn daguu 「に従って」 {-GEN accordance} (yum)=šig/met(=l) {(thing)=like (=EMP)} 「ように」 -tAj adil 「と同じく」 {-COM same}

¹² Kullmann & Tserenpil (2015: 318, 319) では xedij-geer ... bol-wč {how.much-INS ... to.become-CONC}, xedij tijm bol-wč {how.much yes to.become-CONC} といった形式で掲載されているが、bol-wč はこれらの先行要素を伴わずに使用される例も見られるためここではこの語単独の形式のみ掲載した。

Kullmann and Tserenpil (2015: 318) は V-sn-AAr という形式を挙げるが、これも形動詞接辞 -sn に固定された表現ではないと見てその他の -AAr {-INS} に集約した。

5. 問題提起

本稿で考察の対象とするのは -xAAr という形式である。表2を見ると、「IIp 目的」の欄に -xAAr という形式がある他、表1「Ir 相対的時間」、表4「Vs 提案」、「VI 様態」に含まれる造格接辞 -AAr は未来形動詞接辞 -x に後続すると -xAAr という形になり、これらは同形である。清格尔泰 (1991), Janhunen (2012), Kullmann & Tserenpil (2015) はいずれも「目的」を表す副動詞接辞 -xAAr と形動詞接辞 + 造格接辞からなる形式をそれぞれ別個に扱っているが、その両者の関係については十分な説明をしていない¹³。

ここで仮に -xAAr (表1~4における -AAr も含む) が有する諸機能が単一の形式の持つものであるとして、Aikhenvald (2009: 390) による節連結の多機能性のまとめと照らし合わせてみる (表5)。-xAAr という1つの形式が「Ir 相対的時間」、「IIc 原因」、「V 様態」を有することは表5(「様態」列と「原因」「時間」行の交差点に x がある) とも矛盾しない。しかし「IIp 目的」が「V 様態」と形式を共有すると、少なくとも表5に示された結果には合わない(「原因」列と「様態」行の交差点に x がない) と言える。

表5. 節連結標示の多機能性 (Aikhenvald 2009: 390, Table に一部筆者網掛け)

時間					※交差部分に x がある場合、列と行のそれぞれの節連結の意味を1つの形式で表すケースがいずれかの言語で見いだされたことを示す			
x	条件							
x	x	原因						
x		x	結果					
x		x	x	目的				
	x	x	X	x	潜在的帰結			
x	x	x	X			追加		
		x	x			x	対比	
	x				x	x	x	代替
x		x						様態

ここで、次のような問題提起をする。目的を表す用法とそれ以外の用法とでは、意味的な違いという理由以外に分かつ根拠があるのだろうか。表5を見ると先行研究では同一の形式が「目的」と「様態」の意味をいずれも持つという例が無いようであるが、モンゴル語の同形式は Aikhenvald (2009) の整理に新たなるデータを提供するものとなるのだろうか。また同じく表5では同一の形式が「目的」と「時間」の意味をいずれも持つという例があることも示されているが、この「時間」に含まれる節連結の意味は多岐に渡る点が考慮されてい

¹³ 清格尔泰 (1991) は文語表記のモンゴル語を扱ったもので、両形式は表記上異なるものである。しかし(6)に「目的関係」とあることから両形式に意味的共通性があることは認めているものと思われる。

ない点が問題であると思われる。「A するために B する」といった目的の意味は、「A するに先じて B する」といった時間関係の意味とは類似すると考えられるが、「A したときに / A したあとで B する」といった時間関係の意味と形式を共有することはないのではないか。すなわち、-xAAr は多機能な単一の形式というより、同音異義の複数形式であると見るべきなのではないか。

以下の議論では -xAAr の形式と意味の関係を明らかにするために、google 検索やコーパス調査¹⁴によって -xAAr を含む動詞形の出現する用例を収集し、その意味を解釈することで -xAAr の実際の使われ方を精査していく。さらに形動詞接辞に造格接辞が付された形式であれば再帰所属接辞が付される可能性もあると見て、同じく -xAAr-AA {-XAAR-REFL} などといった形式についても用例を集め、比較検討する。

6. 分析

6.1. 「時間」「原因」「様態」

-xAAr という形式は一見多機能的であるが、「目的」の意味になる場合と「時間」「原因」「様態」を表す場合とでは所属のカテゴリの接続可否に違いがある可能性がある。後者の場合には再帰所属 -AA や、三人称所属 =n' が付され、主節との同主語・異主語が示されうる。(8) は再帰所属 -AA を伴う同主語の例、(9) は三人称所属 =n' を伴う異主語の例である。

(8) *bi udaxgüi gar utasny dugaar awaxaaraa tan' ruu myessyež bičiz baina aa!*

bi udaxgüi gar utas-IIn dugaar aw-xAAr-AA tan'=RUU myessyež
1SG soon hand phone-GEN number to.get-XAAR-REFL 2SG.HON=ALL message
bič-ž bai-nA=AA
to.write-SIM to.be-NPST=EMP

「私はまもなく電話番号を手に入れたらあなたにショートメッセージを書きますよ！」

L. Tüdeu “Tuuraitai zarlig, ödtei bičig”

(9) *tüügeer olimp sonsood mongol xün alt awaxaar n' xanaa nüdeed, uilaldaad böön bayar l bolloo.*

ter-AAr olimp sons-AAd mongol xün alt aw-xAAr=n' xana-AA
that-INS Olympic to.listen.to-ANT Mongolian person gold to.get-XAAR=3 wall-REFL
nüd-AAd ujald-AAd böön bayar=l bol-lAA

¹⁴ SketchEngine 上で試験運用されている CEFR-Jx28-Mongolian というコーパス (学校教科書やウィキペディア記事などから成り、総トークン数は 8,407,629) を用いた。Wordlist 機能を用いて語末に xAAr を有する語形を検索すると 1018 項目 9468 件が検出される。検索上のゴミを目視でざっと取り除くと調査対象となる動詞形の出現数は 8524 となる。同様に -xAArAA を検索すると 79 項目 216 件がヒットする。

検索に際しては Criteria を Advanced として ending with を選択し、大文字・小文字を区別しない設定で正規表現を用いて `[.acëñïïöøγүэя]x(aa|oo|öø|ээ)p` をキーとした。これは -xAAr を除いた動詞語幹部分は必ず 2 文字以上から綴られ、おそらく正書法上 -xAAr の直前には母音が必ず 1 つ以上綴られることを表す。得られた結果のうち検索上のゴミ (動詞以外の例) として目立つのは ünexeer 「本当に」、arwajxeer (地名) があり、その他 xAAr の前に 2 文字だけ綴られた短い語の中から探した。これらを除いても動詞と名詞が同形の *šüüxeer*, *tüüxeer* といった例は除外できていない。

to.hit-ANT to.cry.each.other-ANT everyone happy=EMP to.become-PST

「それ (=ラジオ) でオリンピックを聞いて、モンゴル人が金 (メダル) を取ると壁を叩いて泣き合って皆で喜んだんです」
 インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/47m5k>)

ただしこれらの標識が用いられることは必須の要件ではない。次の例のように所属のカテゴリを示さないが「時間」「原因」の意味を表わしていると見られる例も見られる。次の例 (10) は同主語の例だが、再帰所属は付されていない。

(10) *süüljijn üyed xoolond n' neg l durgüj, ünერიjg n' awaxaar dotor n' muuxaj orgij ogiuldag boljee.*

süül-IIn üye-d xool-d=n' neg=l durgüj ün-Ilg=n' aw-xAAr dotor=n'
 tail-GEN time-DAT meal-DAT=3 one=EMP dislike smell-ACC=3 to.take-XAAR inside=3
 muuxaj orgi-ž ogiul-dAg bol-jee
 dirty to.feel-SIM to.vomit-HBT to.become-PST

「最近は食欲も全然なく、においを嗅ぐと気持ち悪くなって吐き気を催すようになった。」
 (CEFR-J Corpus: 11_eruul_mend.txt)

所属のカテゴリは、節連結の形式のうち表 1 の形動詞の多くと、副動詞 V-ngUUt, V-mAgc, V-xIAAr 「するやいなや」に付されうる。V-xIAAr はその形式が -xAAr によく似ており、Kullmann & Tserenpil (2015) では前者の代替として後者が用いられるとの記述があるが、少なくとも共時的には形動詞接辞+格接辞などのようには分析できない。従って所属のカテゴリが付されることそのものは、この形式を形動詞接辞 -x + 造格接辞 -AAr からなるものであるとする決定的な根拠にはならない。

他方、こうした「時間」「様態」を表す用法では、-x の部分を他の形動詞接辞と置き換え可能であるらしいことが清格尔泰 (1991: 298-303) (7)b, c や Janhunen (2012: 170) によって示唆されている。さらに次の (11) のように、-x と -AAr の間に否定を表す =güj を挿入した形式が「時間」「原因」または「要因」の否定形 (-x=güj-AAr 「しないことによって/しないときに」) を成していると見られる例もある。

(11) *šinžlex uxaan tyexnologijn ololtyg ašigla-x=güj-AAr yamar č uls oron xögžix bolomžgüj.*

šinžlex+uxaan tyexnologi-IIn ololt-Ilg ašigla-x=güj-AAr yamar=č
 science technology-GEN achievement-ACC to.use-FUT=NEG-INS what=ever

uls oron xögž-x bolomž=güj
 nation country to.develop-FUT chance=NEG

「科学技術の成果を利用しなければ/せずには、どんな国も発展できません」

インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/46308>)

このことは「時間」「原因」「様態」の意味を表す $-xAAR$ は形動詞接辞 $-x \{-FUT\}$ の付された動詞形に造格接辞 $-AAr$ がついて成された疑似副動詞と呼びうるものであることの根拠となるであろう。形動詞接辞の部分は $-sAn \{-PRF\}$, $-dAg \{-HBT\}$ に変更可能で、主節のテンスに対する相対的な時制を表すことが可能であるだけでなく、形動詞接辞の直後に否定の $=güj$ を付すことで従属節中の命題を否定することも可能である。

なお「時間」「原因」「様態」という3つの意味は連続的で必ずしも区別できるものではない。おそらく造格の有する道具・手段の意味から様態「～する／したことによって」の意味を成したのがこの形式の本来的な用法であろうと考えられる。ここから「～する／したので」という原因の意味が生じ、「～する／したとき」という時間の意味を表すに至った。

6.2. 「目的」

$-xAAR$ が「目的」の意味で用いられるとき、6.1. で「時間」「原因」「様態」の場合に見たような様々な形式の可能性がない。所属のカテゴリは付されえず、形動詞接辞の $-sAn \{-PRF\}$, $-dAg \{-HBT\}$ や $=güj$ を伴う否定形に置き換えることは不可能である。

Janhunen (2012: 164) はこの形式を *conjunct* の節連結を成すものと位置付けており、すなわち従属節と主節が同主語の場合にのみ使われるものであるとしている。本来的に同主語しか表し得ないために、所属のカテゴリを付しえないのであろうと考えられる (12)。

(12)a. *xüü eež aaw-d-AA zoriul-n beleg aw-xAAR möngö cugluul-žee.*

xüü eež aaw-d-AA zoriul-n beleg aw-xAAR möngö cugluul-žee
son mom dad-DAT-REFL to.intend-ASS present to.buy-XAAR money to.collect-PST
「子どもは親のために贈り物を買おうとお金を集めた」(CEFR-J Corpus: 03_matematics.txt)

b. *xüü eež aaw-d-AA zoriul-n beleg *aw-xAAR-AA möngö
son mom dad-DAT-REFL to.intend-ASS present to.buy-XAAR-REFL money
cugluul-žee
to.collect-PST*

否定目的「～しないために」を表すためには、表2. 「III 潜在的帰結」で見たような表現で代替することとなる (13)。

(13)a. *ter šalgaltand unaxgüjn tuld šurguu ajillasan.*

ter šalgalt-d una-x=güj-IIn tuld šurguu ajilla-sAn
that exam-DAT to.fail-FUT=NEG-GEN purpose hard to.work-PRF
「彼は試験に落ちないように真面目に働いた」 (Kullmann and Tserenpil 2015: 313)

b. *ter šalgalt-d una-x=güj-AAr šurguu ajilla-sAn
 that exam-DAT to.fail-FUT=NEG-INS hard to.work-PRF

その他、目的節の相対的なテンスを操作することができないのは、「目的」というものが主節の表す絶対的テンスに対して時間的に後の事柄を表すからであると説明できよう。

6.3. その他

その他、コーパス上の用例を見ると -xAAr という形式の節連結的でない用法も見出された。(7) で見た清格尔泰 (1991) による意味記述のうち 10) 「未然」にあたる意志や決定を表す動詞述語の補語項になる用例が多数得られた (14)。

(14) *tuyaa delgüürees 5 dm tuuz awaxaar bolow.*

tuyaa delgüür-AAs 5 dm tuuz aw-xAAr bol-w
 PN shop-ABL 5 decimeter ribbon to.buy-XAAR to.become-PST

「トヤーはお店で 50 センチのリボンを買うことになった」(算数の文章題)

(CEFR-J Corpus: 02_matematick.txt)

この例では bolow 「なった」が -xAAr 形の動詞を伴い、「～することになった」という意味を成している。これと同じ用法の -xAAr を伴う動詞としては、ほかに šijd_ 「～することに決める」、tölöwölö_ 「～しようと計画する」、toxirolc_ 「～しようと約束する」などがよく用いられる。なお、bol_ 「なる」は名詞を補語に取る(「A は B になる」)場合、当該の名詞は裸で現れ造格は要求されない。šijd_ 「決める」、tölöwölö_ 「計画する」は対格名詞を要求し、toxirolc_ 「約束する」は補文標識 ge-ž {to.say-SIM} を伴う引用句などを要求する。従って -xAAr という動詞形は動詞側の名詞項に対する要求とは関係なく現れていると見ることができる。また、この -xAAr には所属のカテゴリが標示されない。

清格尔泰 (1991: 301) はこの未然の用法として -xAAr の後ろに否定を表す =güj を付した例を挙げている。コーパスからも -xAAr=güj の用例は多数見られた。

(15) *či minij üürend orž čadaxaargüj tom yum.*

či minij üür-d or-ž čad-xAAr=güj tom yum
 2SG 1SG.GEN nest-DAT to.enter-SIM to.be.able-XAAR=NEG big thing

「あんたは私の巣に入れないくらい大きいんだ」

民話 (CEFR-J Corpus: 03_mongol_yos_khumuujil.txt)

否定の =güj は名詞の語幹に付されて存在の否定を表すが、格接辞の後ろには付されえない。=güj が付きうる動詞の屈折形式としては、名詞的な曲用が可能な形動詞接辞の付された動詞形がある。-xAAr が他の形動詞接辞と似たような振る舞いをする例として、条件標示 =bol 「～ならば」を後続させる例 (16) や存在動詞が後続する例 (17) がある。

(16) *zaaxyn tijn yalgal awaxaar bol -n dagawar awna.*

zaa-x-IIIn tijn+yalgal aw-xAAr=bol -n dagawar aw-na.
 to.point.out-FUT-GEN case to.take-XAAR=COND -n suffix to.take-NPST
 「対格を取るなら接辞 -n を取る」 (CEFR-J Corpus: 05_eruul_mend.txt)

(17) *xödöö bajгаа өwөө emeetejgee yaaž xolboo barix we geed olon asuudal üüsexeer bajгаа biz?*

xödöö baj-AA өwөө emee-tAj-AA yaa-ž xolboo
 countryside to.be-IPFV grandpa grandma-COM-REFL to.do.how-SIM relation
 bar'-x=we ge-AAAd olon asuudal üüs-xAAr baj-AA=biz
 to.hold-FUT=Q to.say-ANT many problem to.rise-XAAR to.be-IMPV=SFP
 (携帯電話が無かったら)「田舎にいる祖父母とどうやって連絡を取るかといったいろい
 ろな問題が起きそうですね」 (CEFR-J Corpus: 05_eruul_mend.txt)

この (14)~(17) の例はいずれも目的「~するために」という訳だと据わりが悪いが、「~しよう」となどと読み替えることはできそうである ((14)「買おうとすることになる」(15)「入れようもない」(16)「取ろうとするなら」(17)「起きようとしている」)。目的節も「~しようとして」と解釈しうることを考えると、これらは意味的に関連するものなのではなかろうか。形式的にも所属のカテゴリが付された用例は得られていない。

(7) で見た清格尔泰 (1991) による意味記述のうち 3) 「主述関係 (走るのが早い)」とは -xAAr が形容詞述語の項として用いられる用法を意図したものであろうと思われる。これにあたる例として次の (18) が得られた。

(18) *xerew ted bidnij zöwlogöo xüleen awaxaar neelttej bol zan bajdlynx n' sörög ür dagawryg xelž ögč, tüünijg zogsoox xeregtej.*

xerew ted bid-IIIn zöwlogöo xülee-n aw-xAAr neelttej=bol zan
 if 3PL 1PL-GEN advice to.wait-ASS to.take-XAAR open=COND habit
 bajdal-IIIn-x=n' sörög ür dagawar-IIg xel-ž ög-ž
 situation-GEN-thing=3 negative outcome consequence-ACC to.say-SIM to.give-SIM
 ter-IIg zogsoo-x xeregtej
 3SG-ACC to.stop-FUT necessary

「もし彼らに私たちの助言を受け入れる気があるなら、その振る舞いが悪い結果につながることを伝えてあげる必要があります」(CEFR-J Corpus: 11_irgenii_yos_zui.txt)

形容詞は項として造格を要求する用法があるので (清格尔泰 1991: 167)、(18) の -xAAr は造格を含む形式であると見るべきかもしれない。しかし所属のカテゴリを含む形式などはコーパスなどから見出すことはできなかった。

清格尔泰 (1991) が言うところの 10) 「未然」の用法 (動詞 bol_「なる」などの補語となる用法, (14)) とその他 -xAAr の付いた動詞が名詞的な振る舞いを見せる用法 (否定の

=güj を伴う (15), 条件の小詞を伴う (16), 存在動詞を伴う (17)) は -xAAR の目的の用法と意味的に連続的である。このように見たとき、目的の -xAAR はこれを副動詞接辞であると認定したとしても、名詞的な振る舞いをする形動詞接辞らしさを見せる点で他の典型的な副動詞接辞とは区別した方が良いのかもしれない。

7. おわりに

-xAAR という形式には節連結の多様な意味・用法が記述されているが、主たる用法として時機関係「～すると」などの意味を表すものと目的「～するために」があり、これらは同音異義の別形式であると見るべきである。前者時期関係の -xAAR が形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAR が付されたものであると分析しうるのに対し、目的を表す -xAAR は少なくとも共時的には造格接辞を含むものと分析しがたい。これは従来の記述にも同様の指摘はされてきたが、所属のカテゴリや否定小詞の付加の可不可、その他名詞的な振る舞いなどの観点から根拠を示したものは無かった。名詞的な振る舞いからして目的を表す -xAAR も典型的な副動詞接辞とは異なるものである。

議論の出発点として Dixon (2009) による節連結の分類と Aikhenvald (2009) によるそれらの相互関係を見たが、とくに「相対的時間」が他の節連結の意味と繋がるのかについてはなお議論が必要である。今後は、より精緻な意味地図を描き出していくことで節連結の類型論研究を発展させていく必要がある。

ところでモンゴル語の -xAAR を巡っては目的副動詞の古形 -rA との関係も問題になる。この点の精査は今後の課題としたい。

略号一覧

ANT	anterior 先行	EMP	emphatic 強調	PN	proper name 固有名詞
ASS	associative 連合	HBT	habitual 習慣	SFP	sentence final particle 終助詞
CONC	concessive 譲歩	HON	honorific 尊敬	SIM	simultaneous 同時
DAT	dative-locative 与位格	(Leipzig Glossing Rules に記載されていないもののみ掲載)			

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2009) Semantics and Grammar in Clause Linking. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. pp380-402.
- 蔡熙鏡・山田洋平・日高晋介・吉岡乾 (2021) 「アルタイ型言語における節連結の意味とその形式的特徴」 日本言語学会第 163 回大会ワークショップ.
- Dixon R. M. W. (2009) The Semantics of Clause Linking in Typological Perspective. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. pp1-55.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

山田 洋平

Kullmann, Rita & Dandii-Yadam. Tserenpil (2015) *Mongolian Grammar*. 5th revised edition.
Switzerland: Kullnom Verlag.

清格尔泰 (1991) 『蒙古语语法』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

Mongolian Verbal Form -xAAr
-From a Perspective of Meaning and Formal Characteristics of Clause Linking-

YAMADA Yohei
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Mongolian, clause linking, converb, final clause

In this paper, based on Dixon's (2009) classification of clause linking and Aikhenvald's (2009) study of the relationship between the groups of clause linking, I argue that the Mongolian verbal form -xAAr, with its wide variety of meanings and clause linking functions, should be regarded as distinct homophones, with the main uses being those expressing a time relation such as "when" and those expressing a final clause such as "in order to". While the former -xAAr of time relation can be analyzed as the participle suffix -x with an attached instrumental suffix -AAr, -xAAr for final clause is not to be analyzed as including an instrumental suffix, at least synchronically. This has been pointed out in previous studies, but no evidence has been presented in terms of the category of nominal possessives, a negative particle, or other noun-like behavior. Due to its noun-like behavior, the form -xAAr, which is used for final clause, differs from typical converbs.